

優秀修士論文概要

シリア正教徒／スルヤーンのディアスポラの言論空間に於ける
「祖国」と「ネーション」

——雑誌『スルヤーン連盟』を中心に（1945－1956）——

阪 本 侑 己

近代西欧に由来するネーション・ステイトの論理は、オスマン帝国内の諸集団をして民族意識に覚醒せしめる効果を持ったが、同様に民族意識に覚醒しながらもついには「独立国家」を形成せず世界各地へのディアスポラを余儀なくされた、シリア正教徒／スルヤーン⁽¹⁾という集団があった。この集団は独自の言語であるシリア語を保持するキリスト教徒集団であり、近代には自集団を古代オリエントの諸民族の末裔と認識するようになったが、彼らの故地におけるキリスト教徒虐殺等により世界各地へのディアスポラを余儀なくされたのである。本研究は、シリアの脱植民地化の過程やディアスポラの経験が、彼らの「ネーション」や「祖国」への意識をどのように形成し変容させたのか、という事を提示するものである。

近代のシリア正教徒／スルヤーンはこのような国民国家の論理に翻弄され、ディアスポラの状況を強いられた集団であるが、彼らについて扱った研究は依然として非常に少ない。また、19世紀後半から20世紀初頭にかけてはシリア正教徒／スルヤーンのみならず他の諸宗派のシリアの人々が南北アメリカへと移民をしていたが、これらのシリア系移民研究については、移民受け入れ国におけるエスニシティの問題など、国家の枠組みを所与とし、その内での分析に終始しているという問題がある。そこで、研究の視角としてディアスポラという概念を本研究は導入する。近年盛んなディアスポラ研究においては、ディアスポラとは、「国民国家の論理を乗り越えるもの」と想定される事が多い。筆者もまた、ネーション・ステイトが「復権」しつつある今日においてこそ、狭量なナショナリズムの論理を乗り越える契機をこれらディアスポラの経験に探るべきではないかと考える。故に本研究は、中東においても周縁化されディアスポラ的な生を送る事を余儀なくされた集団、シリア正教徒／スルヤーンに着目し、その言論空間において、「祖国」や「ネーション」に関しどのような言説を表明し議論していたのかを明らかにする事を目指した。なお、本研究で中心に用いる史料、『スルヤーン連盟 (*al-Jāmi'a al-Suryāniya*)』はシリア出身のファリード・ヌズハーが移民先のプエノスアイレスから発行していた月刊雑誌である。当雑誌は、シリア語に関する論説やシリア正教徒／スルヤーンの歴史に関する記事が多い事からも文芸雑誌としての性格が強いが、シリアに関する政治的な論説も度々掲載されている。またアルゼンチンから発行されているものの、シリアをはじめ世界各地のシリア正教徒／スルヤーンやアルゼンチン人からの投書があり、この雑誌は各地の知識人に読まれるとともに移民先の社会とも接合していたのだ。

当雑誌の検討に移る前に、雑誌の発行地であるアルゼンチンに着目しておこう。19世紀末より多くのシリア系の人々がアルゼンチンなどへ移民をしていくが、これら移民はアルゼンチンに到着した後は主に行商に従事して各地にコミュニティを築いた。そしてこれら移住者たちは現地のアルゼンチン人からの眼差しを受けながら、種々の新聞・雑誌を発行し、そのアイデンティティを構築したのだ。アルゼンチン人からシリア系移民へ寄せられる視線は両義的である。一方で大衆紙などに見られた言説とは、シ

リア系移民とは産業の労働力とならない望まれざる移民であるという事だった。一方でこうした差別的な言説の裏にはオリエンタリズムの心情があり、シリア系移民を「神秘的な力を持つもの」として表象し本質化する。このような本質化された表象はアルゼンチン人、シリア系移民双方によるテキストに見られ、これらのテキスト間の応答によって本質的なアイデンティティが編成されたのだ。『スルヤーン連盟』もまたこうしたテキスト間の応答の場であり、「東洋人には精神的な力がある」とするアルゼンチン人の言説が『スルヤーン連盟』紙上に掲載される事で、「東洋人」アイデンティティが内在化されていった。

翻ってシリア系移民からアルゼンチンへの眼差しについて言うと、アルゼンチンとは「彼らの国」であり、「我らの祖国」ではないという意識が伺えた。以上から、南米においてシリア正教徒／スルヤーンなどシリア系移民は、周囲からの眼差しを内在化させて、本質的な「東洋人」意識を持った事や、南米とは別の参照すべき土地——「祖国」——への意識を持った事が明らかにされた。

以上のようなコンテクストを踏まえた上で、『スルヤーン連盟』に現れた「祖国」と「ネーション」に関する言説の検討が行われた。「シリア正教徒」など東方のキリスト教徒諸集団の民族意識の復興を企図して創刊され、「スルヤーンのネーション」という語が頻繁に現れた当雑誌であるが、1946年前後のシリア共和国独立期には「シリアのネーション」という言説がしばしば見られた。それによると「シリアのネーション」とは古代オリエン特諸民族の末裔であるとされ、古代の諸民族の直系たる「スルヤーンのネーション」は、同様に古代の諸民族に遡る「シリアのネーション」の内に包摂されうものとして想像されていたのである。

こうした「シリアのネーション」は土地との間に密接な関係を持つと想像されていた。即ち、『スルヤーン連盟』によると「祖国」と「民族主義」は現在窮状にあり、これを再生するには民族主義が精神、祖国がその器たる身体として、その有機的な結びつきが目指されねばならないのだ。かかる理解とともに、『スルヤーン連盟』紙上では「祖国」として「シリア」への帰属意識が表明され、「シリアのネーション」と「祖国」の結びつき、その復興が称揚されていた。また、シリア独立期までの「シリア」についての言説は国境の内の均質な市民ではなく、古代の民族に遡る「シリア民族」に力点が置かれていた。これ故にシリアとレバノンが別個の国家として存在する事は「不合理」と見なされるなど国境線は暫定的なものと捉えられており、「シリア民族」の「祖国」は必ずしも「国民国家シリア」の領域に限定されない事が明らかとなった。

1946年4月にシリアは独立を達成したが、国内のクーデターや、中東戦争における敗北などにより、独立後のシリア共和国の歩みは混乱に満ちたものとなった。こうした情勢を受けて『スルヤーン連盟』の言説には変化が見られた。即ちこれらの混乱により、逆説的にシリア国家の位相が所与のものとなり、シリア国民の団結が以前にもまして希求されるようになったのだ。ここにおいて国境の内の住民を均質な国民へと変えていくような、「国民主義」が重要性をもって位置づけなおされるのである。国内の政治状況や「祖国の敵」に対する敗北を経て、主張される言説が「シリア民族の復興」から「シリア国民の団結」へと推移したのだ。

しかしながら、このような国民の団結を訴える政治的言説は、徐々に数を減らし、1954年から1956年にかけてはほぼ書かれなくなる。結局、「古代アッシリアの栄光」や「スルヤーンのネーション」といった語はシリア政府に『スルヤーン連盟』が分離主義的思想を持っていると疑念を抱かせるに十分であり、『スルヤーン連盟』は政治的言説を表明しなくなり、「スルヤーンのネーション」をシリアの内に積極的

に位置づけようとする想像力も失われていったのだ。そこで表明されるのは、主権の論理とは遠ざかった、「主権なきネーション」と呼ぶことのできる言説であった。例えば「スルヤーンのネーション」という表現への疑念に対しては、主権を有さない、「種族的な」差異のみを有するネーション像を『スルヤーン連盟』は提示していた。つまり、一切の分離主義的な疑念を否定し、現状の中東のネーション・ステイト体制とは距離を置く事で、異なった「種族性」を持つ集団としての存続を模索したのである。アメリカ合衆国からの投書においても、「平和を求める民族」として「故郷を領有する事」をよしとせず、固有の文化を保持しながら平和に生きる事を主張していた。つまり、「祖国」として立ち現れたシリアは政治的に不安定であり、「シリアのネーション」という言説と「スルヤーンのネーション」という言説を並置する事は危険と見なされたのである。こうした状況の中での生存戦略とは、政治的な無力さを是とし、文化的な集団として生き残りを図る事であった。この点で『スルヤーン連盟』のディアスポラ言論空間における「シリア」への想像力は後景に退き、「スルヤーンのネーション」は「主権なきネーション」としてその存続を模索したのである。

こうした無力さを是とする姿勢が鮮明になる以前の『スルヤーン連盟』はナショナリズムの論理に回収されていた事からも、ディアスポラの経験は必ずしもユートピア的な解放の言説であるとは限らない。また、この無力さを是とする姿勢は、不安定なシリア情勢の中で生き延びる処世術であり、積極的に彼らにとって選び取られたものではないだろう。シリアのナショナリズム思想の主流足り得ない事が明白になった時点で、他集団に干渉しない無力さこそが文化的差異を存続させる点で重要であると、『スルヤーン連盟』は認識したのである。主権の論理に基づく闘争の絶えぬ現在にこそ、こうしたディアスポラの経験から、主権がなくとも文化的差異を存続させる事ができる事を我々は学び取るべきであると筆者は考える。

注

- (1) アラビア語での彼らの自称「スルヤーン」は、その境界が必ずしも「シリア正教会の信徒集団」に一致するわけではない。本稿では集団のアイデンティティの本質化を避けるためにも、『スルヤーン連盟』の言論空間に参加していた、自らをアラビア語で「al-Suryān」と表現していた人々を「シリア正教徒／スルヤーン」と呼称する。